



編集後記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 住友, 陽文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/13775

編集後記

最新号の9号をお届けいたします。6本の研究論文を掲載することができました。

今回は、編集と予算執行の都合上、投稿の締め切りを厳格にしたためか、例年と比べて投稿数が多くありませんでした。今回投稿をあきらめた方も、次はぜひお願いします。

ところで、宮崎駿監督の『風立ちぬ』を昨年見ました。零戦という兵器を設計する堀越二郎を主人公とする話です。大方の観覧者は、堀越と妻である菜穂子との間の恋愛・夫婦愛の物語に心を奪われたと思いますが、考えてもみれば堀越の仕事は殺人マシンを作ることでした。その殺人マシンを嬉々として作る主人公の姿を描いておきながら、宮崎監督のこの映画を通して投げかけたメッセージは「それでも生きねばならない」でした。誰かを犠牲にして、生きる——程度の差こそあれ、大方の人はそういう構造の中で生きていても言えます。この話は零戦を主題にしたものでしたが、例えばそれを原発にしても、成り立つ話だったでしょう。さらに宮崎監督は、堀越が美しい零戦を作るという夢を追いかけながら生きることと、その零戦によって犠牲になる人がいることとは直接的にも関係しているにもかかわらず、堀越の眼差しから犠牲者の存在をわざと死角になるように描いていました。堀越が追求した夢と犠牲者とは決定的につながっていたにもかかわらず、堀越の眼差しとその眼差しから死角になった戦争の犠牲者たちとの距離は絶望的なまでに遠かったと言えます。宮崎監督は、この映画を通してそのような絶望的な世界を補正するためのヒントを私たちに与えることなく、それをありのまま描き、物語を終わらせています。3.11以前からの構想に基づいた映画らしいですが、3.11の衝撃がそこには影を落としているように思えました。

私たちは——特に人文系の研究者は——この絶望的な世界の構造に、すでに自覚的であったでしょうし、3.11以後はそれゆえその絶望的な世界の中で煩悶して立ちすくんでしまう人もいたかもしれません。いや、そういう時こそ、あえてその絶望的な世界の構造に分け入り、そのメカニズムと原理を明らかにしなければならないのではないのでしょうか。学問に携わり研究をするということは、そういう意味で因果な商売なのです。

ここで、尊敬する歴史家の言葉を紹介しておきます。日本古代史家の石母田正の言葉です。

このペシミズムをつきぬけないオプティミズムは、私には信頼しかねるものがあつたのである。日本人の歴史にたいする啓蒙主義的オプティミズムを私も人に劣らずもっている。しかし歴史の痛苦を忘れたところに成立するオプティミズムは、私の真に求めているオプティミズムではない。（「国民のための歴史学」おぼえがき 1960年）

彼の名著『中世的世界の形成』の結末が国家権力に対する敗北で終わったことへの石母田の解説がこれです。今も私たちは「歴史の痛苦」に直面しつつあります。それから眼差しをそらさないで、あえてその構造の解明に没入し、そしてそれを突き抜けるべきであるというメッセージが今も聞こえてきそうです。そのあとに来る楽観こそ、もちろん、ここで言う「真のオプティミズム」なのでしょう。（文責 住友陽文）